忘れられない夏

一写一筆　静岡の今　104

浜名湖ガーデンパークのひまわり畑＝浜松市西区、全日写連・辻村友博さん撮影

なんとも暑い8月だった。県内各地は猛暑日（最高気温35度以上）の連続となり、17日には浜松市で41・1度を記録。埼玉県熊谷市で2018年7月に観測された国内最高気温に並んだ。

今夏の猛暑は多くの人の記憶に残りそうだが、誰にも忘れられない「夏」がある。コロナ禍で中止となった「甲子園」を目指した高校球児たちにとっては、生涯忘れることのできない夏だったに違いない。

自分は高校球児ではなかったが、新聞記者時代に甲子園を取材したことがある。45年前の昭和50（1975）年夏の第57回全国高校野球選手権大会である。その年甲子園に来た選手には逸材が多く、優勝した習志野（千葉県代表）のエースは昨年までプロ野球ヤクルトを指揮した小川淳司・前監督、準々決勝まで進んだ東海大相模（神奈川県代表）の三塁手は原辰徳・巨人軍監督だった。

選手も豪華だったが、その年の甲子園が私の忘れられない夏となったのは、開会式の永井道雄文部大臣（教育社会学者）のあいさつだった。「少し天気が悪いんで心配です。しかし必ず晴れます。私の天気予報はよく当たりますから」。曇り空を指さしながら、意表を突くあいさつの出だしに5万人を超えた大観衆が釘付けとなった。そして続けられた次の言葉に、スタンドがどよめいた。「多少雨が降るかもしれないし曇るかもしれませんが、甲子園では必ず心が晴れます」

結果的に、同大会は期間中に二つの台風で5日間も中断した「雨大会」となった。それでも選手や観衆の心は、晴ればれとしていた。

猛暑だった浜松市は9月1日、「浜松は日本一暑く、人も熱い」というキャッチコピーを書いた大横断幕を市内3カ所に設置した。夏を演出したひまわり畑では、秋の虫たちが合唱に向けてスタンバイしている。

（前静岡県監査委員・富永久雄）